

北洋漁業と先住民

ソ連領内の陸上を根拠とする北洋漁業は第二次世界大戦の終結とともに終わりましたが、現代のカムチャツカ半島の先住民社会では日本の北洋漁業時代の記憶が語り伝えられています。日本においても北洋漁業時代の記憶を歴史のなかに留める努力が必要とされているのではないのでしょうか。

戦後再開された北洋漁業は経済水域の規制や入漁料の高騰などから衰退しつつありますが、国内では孵化放流技術の進展からサケ漁獲は増え、また輸入されるサケも多いことから、近年サケの価格は低迷しています。限られた海洋資源の利用は21世紀の大きな課題であり、飽食時代に生きるわたしたちはもう一度サケを<神の魚>として見直すときにきているのではないのでしょうか。



クマ送り用サケ／北海道アイヌ



サケ缶詰 (市立函館博物館蔵)

表紙写真:魚叩き棒／上から北海道アイヌ・北西海岸インディアン(2本)・最上川水系



魚皮製バッグ／ウイルタ
(市立函館博物館蔵)

協 力

市立函館博物館
函館市北方民族資料館
函館市北洋資料館
財団法人 致道博物館
村上市内水面漁業資料館
株式会社 ニチロ

1999・7・20(火・祝)～9・26(日)

開館時間 9:30～16:30

休館日 月曜日

特別展観覧料

一 般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200)円	80(50)円	50(30)円

※カッコ内は10人以上の団体の場合

第14回特別展

神の魚・サケ —北方民族と日本—



 **北海道立北方民族博物館**
Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
TEL0152-45-3888

北太平洋に分布する7種のサケ属魚種（シロザケ、カラフトマス、ベニザケ、マスノスケ、ギンザケ、サクラマス、ニジマス）は古くから沿岸の人びとに貴重な動物資源をもたらしてきました。本特別展では北方諸民族のサケ利用および近世以降の日本のサケ漁業を中心に、サケと人のかかわりを紹介します。

北方諸民族とサケ

北太平洋沿岸の諸民族はサケに依存してきた人びとです。乾燥したサケは貯蔵されて、長い冬を過ごす食料となり、また、一部は猟犬や橇犬の餌にも利用されてきました。また、サケの皮は防水性が高く、アムール流域やサハリンの民族はサケや川魚の皮で衣服や靴、バッグ類などを作り、アイヌも冬靴の材料としてきました。

サケの捕獲には築や籠罾、小型の網のほかさまざまな突き取り具が用いられてきました。とくに、突き取り具では魚体を捉えた先端部が柄から離脱する構造が共通してみられます。この特徴は捕獲時の衝撃を緩和し、サケを確実に引揚げるためと考えられています。さらに、アイヌの鉤鈎と同じ形式・機能をもつ突き取り具がサハリンやカムチャツカ半島にもみられます。



エヴェンの鉤鈎

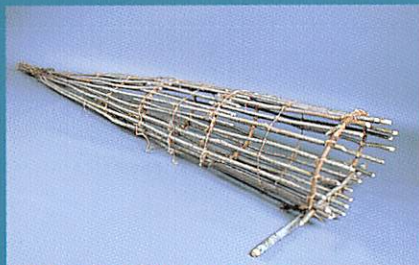


コリヤークの鉤鈎の鈎



アイヌの鉤鈎

北方の人びとはサケを<神>が送ってくれる恵みと考え、サケの靈魂やサケを支配する<神>に対する尊敬の念をもってきました。とくにアイヌ社会ではサケは「神の魚」と呼ばれ、初漁儀礼や叩き棒にみられるようにサケに対する信仰が発達していました。



サケ用籠罾／北海道アイヌ

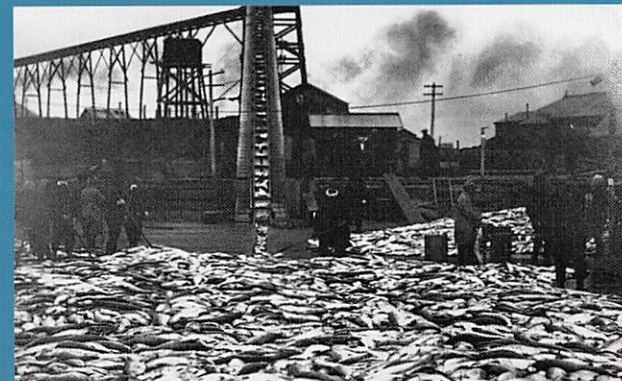
サケ漁業の歴史

北海道のアイヌ社会は、17世紀初頭以前には自ら生産した海産物や毛皮類を本州方面と交易してきました。なかでも干しサケは主要な交易品であったと考えられています。しかし、江戸時代をつうじて蝦夷地の交易は松前藩の独占となり、さらに商人に漁場を請負させた弊害から、アイヌ社会は低賃金の漁場労働に従わされ、サケの引網漁や加工を行なってきました。北前船の輸送手段の確立とともにサケは主として塩サケに加工され、18世紀末には200万尾を越えるサケが本州へ移送されていました。



ソ連と日魯漁業株式会社の契約書
(市立函館博物館蔵)

明治以降は乱獲による国内資源の減少から、河川におけるサケ漁の制限・禁止が行なわれるとともに、国外のサケ資源が注目され、日本人漁業者によるロシア領内のサケ漁が始まります。これら北洋漁業はしだいにカムチャツカ半島を中心に行なわれるようになり、租借漁区におけるサケ漁と加工が始まりました。国内向けの塩サケも生産されていましたが、とくに輸出用のサケ缶詰生産が主力となっていきました。



カムチャツカにおける操業。工場へ送り込まれるサケ
(市立函館博物館蔵)



カムチャツカにおける操業。缶詰工場設備の陸揚
(株式会社ニチ口蔵)